アイヌの住居―竪穴住居からチセへ

アイヌは、彼らが住居（チセ）を建て始めた 13 世紀頃まで竪穴住居に住んでいました。竪穴住居は、入り口からしか光が入らず暗いものでしたが、寒さに対する断熱性に優れていました。これらの住居は通常、正方形か長方形で、深さが 1 メートルほど掘り下げられていました。支柱が中央部で数メートルの高さまで立ち上がり、地面まで傾斜する茅葺き屋根を支えていました。内部には中央に炉があり、暖房や調理のスペース、そして食品を燻製にする場所として使われていました。

竪穴式住居の中の空気は煙が充満しており高湿度でした。より良い居住条件を求めることが、住居（チセ）への移行の動機になったと考えられています。チセは本州（日本の本島）の家に似ており、暖房用の中央炉が加えられていました。樺太（サハリン）などの寒冷地のアイヌの中には、冬は竪穴住居を使用し、暖かい季節には漁場近くのチセに移動する人々もいました。